

第5回 ルーフシステム株式会社様



星正申顧問（左）と安藤修一取締役工場長（右）



ルーフシステム株式会社本社工場(福島県喜多方市)

金属屋根の総合メーカーとして、福島県喜多方市から全国に最先端の技術を発信するルーフシステム株式会社様。前回ご紹介しました株式会社カナメ様との共同プロジェクト「浅草寺様・宝蔵門チタン屋根葺替工事」を見事成功に導くとともに、「第2回ものづくり日本大賞」経済産業大臣賞をはじめ数々の栄誉ある賞を受賞。その高度な技術力が一躍全国に知れわたることとなりました。同社の特色は、「現代の名工」にも選ばれたという卓越した施工技術者を擁するとともに、現代の名工ご自身が開発業務に深く関わり、近代的な生産システムを次々に開発しているというところ。今回はその現代の名工・星正申顧問と安藤修一取締役工場長に、伝統の継承と新技術との融合、人材育成、金属屋根の過去・現在・将来など、含蓄のある話をお伺いしました。

チタン本葺きを成功させた現代の名工

今日は現代の名工の星顧問にお話が伺えるということで、非常に楽しみにしています。チタン瓦の開発から浅草寺様の受注に至るまでにも、星顧問の力が発揮されたとお聞きしました。匠の技と新しいモノづくりの融合という、この世界では画期的な部分もあったと思うのですが、そのあたりを詳しくお聞かせいただければ。

星 それまでも銅板では、宝蔵門のような本瓦葺きを全国で何百件となく施工してきました。銅板は比較的柔らかいからできたというのがありますが、板金というのは、現場でハゼを作って噛み合わせて、それを叩いて伸ばすと、いろいろな作業がありますので、ベテランでない時間がかかりますし上手くできません。うちでは若い人を定期的に採用していましたから、それでは効率が悪いということで、若い人でも効率よくできる方法を、何年も前から研究していました。それは、工場でプレス成型したものを、現場でサッと組み上げて、それでも仕上がりが同じになるという方法です。

チタンで宝蔵門を施工するという話が出てきたのは、それをやっている最中でした。チタンは反発力が強いから、叩いてもすぐに戻ってしまう。銅板のように現場で細かい作業をしていたらベテランでも間に合わない。まさにそういうやり方が必要でした。だから、この技術は

是が非でも完成させなければならなくなりました。何十回となく試行錯誤して、工法としては見通しが立っても、次は耐風圧や雨漏りの問題をクリアしなくてはなりません。雨漏りに対して弱かったりすると逆戻りです。効率よく作業ができて、風に強くて雨漏りがしない。それでいて従来工法と同じ仕上がりになること、そのすべてが要求されます。いろいろ精密な試験をしながら新工法が完成しました。随所にアイデアが入っていて、特許もいろいろ取ってあります。意匠も全部登録しました。とはいえ、寺社関係の物件は新工法だけでは仕上がりにません。いちばん大事な棟の上、両脇、箕甲などの留めの部分は、従来工法でしか不可能です。新旧の工法を組み合わせながら、どこが従来工法でやったのか、どこが新工法でやったのか、見た目にはわからないようにするのです。

最初は銅板で、若い人でも上手くできる方法を、ということから始めて、その結果チタンでも通用する工法が完成したというわけですね。

星 いちばん苦労したのは噛み合わせです。従来工法では、芯木が打ち付けてあって、そこにプレスされた瓦を打ち付けて、上の丸を全部噛み合わせて、小道具で掴む。それで最後に拍子木で打って潰していきます。だけど新工法ではそういうことはせず、仕上がったものを次々とスライドさせてはめていくだけです。

それで雨漏りもクリアした。すごい技術ですね。



苦心の末、新工法と従来工法の融合により葺き上げられた浅草寺宝蔵門のチタン本瓦屋根。本物の瓦屋根と比べても違和感がない

星 中でも難題は、噛み合わせた中に水が来るということです。漏るのではありませんが、毛细管現象で上がってくるんです。かといってハンダ付けするわけにはいきません。小さな物件だと中を通ってもすぐに軒先に出てきますので雨漏りには至りませんが、大きな物件の場合は何らかの拍子でそれが溢れて中に入る可能性があるわけです。だから絶対に中を通してはダメだということで、開発部隊はいちばん頭を痛めました。

するとそこに、いちばんの独自技術の粋がある。

安藤 そうですね。こういった開発を経験してきた企業でないと、たとえ形は真似できても、なぜこうなのかという理屈がわからないでしょうね。

星 開発現場に試験用の小屋組があって、現場と同じように下地を組んで、試作品で葺くわけです。そして当社独自の実験が始まります。製品化にあたっては、公式の性能評価試験を受けるわけですが、うちではそれ以前の段階で、それよりももっと過酷な試験を行うわけです。

安藤 耐風圧試験や水密試験用に、大きな扇風機があるんです。それとシャワーを使って、風速何メートル、雨量何ミリというふうに、風と雨を叩きつけます。それを裏から観察して、「ここから水が出てきたとか」「大丈夫だ、いや出てきた」とか。それを何回繰り返したとか。ダメだとすぐに設計変更を考えるわけです。

星 普通の雨をいくら降らせても漏れないので、軒先から吹き上がるように雨を降らせたりとか、強度試験でも、これまでみたいに鉄骨の枠に材料を付けて機械で引っ張るのではなくて、やぐらを組んで水を何トンも入れたタンクを置いて、それで屋根材に水を当てたりとか、そういう試験をいろいろしました。

浅草寺様の成功は、すべての過程を頭に入れた開発の成果

目に見えないご苦労があったのですね。

星 実際に屋根をうまく仕上げるには、他にも条件がいっぱいあります。神社仏閣は屋根の勾配が急なので、足

場を設置しながらやっていくのですが、ではどこに足場を設置するのかという問題もありました。まさかチタンを葺いた上に足場を組むわけにもいきません。

安藤 そのあたりまでご説明すると、非常に話が専門的になるのですが、要は屋根を完成させるためのすべての過程を頭に入れた開発をしたということです。

星 それと、そのころちょうどあるお寺の本堂を施工していました。銅板で普通の従来工法でやっていたのですが、そこで新工法を試そうということになりました。開発で使う小屋組はそんなに大きくないので、うまくいって当たり前です。お寺の屋根だと反りがありますが、開発ではそういう反りまで実際の現場通りに再現できるわけではありません。やはり本物のお寺である程度の面積を葺いてみよう。幸いご住職の了解も得られましたので、その一角を銅板ですけど新工法で葺いてみました。その結果、さらにいろいろなことが見えてきました。

なるほど、だから浅草寺様の宝蔵門のような大きな物件が、初めてなのに大成功だった。

星 まあ、始まるまでは少しは不安もありましたが、いろいろやってきた中で、予想される問題点もほとんどクリアしていましたからね。

安藤 最初の2週間くらいは職人もちょっと戸惑っていたようですが、慣れたらもう早いもので、その後は、こうすれば早いとか、いや、こうした方が早いとか、いろいろな改善案が現場の中から生まれてきました。

チタン瓦開発のきっかけ

そもそもチタンに取り組み始めたきっかけは。

安藤 元々、強い屋根がほしいという要望が、関西のお寺からあったんです。ある特定の地域では、銅屋根が酸性雨に弱いとかいう話がありまして、もっと強い屋根はないのかという問い合わせが入ってきました。結局その原因は別のところにあったのですが、銅より強いものとなったら、チタンしかない。それで営業サイドからチタ



チタン瓦の量産を実現したプレス機。装置自体は銅瓦のプレス機と同様だが、数々のノウハウを駆使して運用される

ンの屋根を開発してくれという要望があったんです。もう10年くらい前からですね。

すると、かなり前からそういう話が。

安藤 その前にもチタンの屋根はやっていますが、オールチタンではありませんでした。

星 谷瓦だけがチタンでした。雨漏りを考えると山瓦まではチタンではできなくて、本物の瓦を使いました。

安藤 ただ、開発しろと言われても、作っても売れるのか、というのがありました。開発するということはコストが伴うわけですから、売れなくてはダメなんだ、ということ念押ししました。すると、「お客様のニーズに合った良い製品を開発したら、必ず買っていただけるはずだ。われわれも誠心誠意セールスをする」という強い返事が得られました。それならうちも是非やりたい。そのためには、すべての部品にチタン専用の金型が必要になる、ということで見積もりを取ったら、金型だけで数千万円かかるわけです。それを社長に話したところ、「チタンはこれからの素材だ。それに、みんながそこまでやる気になっているのなら開発しよう」と。そうして大英断が下りまして、営業と一丸になって、チタン本瓦の開発に取りかかりました。そして新工法の開発など、いろんな課題をクリアしてきたのです。

星 銅板は従来工法がありますから、開発ができなくても何とかあるという部分がありますが、チタンをやるとなったら、絶対に新工法を完成させなくてはならない。それで切迫感も生まれてきました。

安藤 新工法はいち早くメドがついたのですが、チタン瓦の開発も含めると、完成までに4年半かかりました。1回作ってダメだったら、2、3週間、試作のためにアイデアを出して試作をして、また試験。それだけで楽に1カ月や2カ月はかかる。何回も試作試験を繰り返して、ようやく満足できるものができました。

星 開発スタッフの中で、職人は私1人です。私は現場を知っていますから、たとえば試験で、「この程度の雨の伝わり方なら現場では影響はない。下葺きも今はいいものがある」と言っても、開発のスタッフは試験を完璧にクリアしないと絶対に承諾しない。現場経験がないものですから、「いや、絶対に水は1滴も通さないようにしないとダメだ」と言って妥協しない。結局、それで完

璧なもののできたんです。

安藤 うちの開発は、エンジニアと現場を知り尽くした職人の混成チームであるという他に、知的財産部門からも1人参加しています。社内には専任の知的財産係がいるんです。といいますのは、公表する前に特許申請をしておかないと、もう公開しているじゃないかということで、特許申請をしても通らないんです。だから開発の途中で、ある程度のもものが確立されたら特許申請するという方法を取っていました。

職人意識との葛藤

若い人でもベテラン職人と同じように仕事ができるシステムを開発された。しかし、そのあたりはずいぶん抵抗があたりだったのではないのでしょうか。

星 それは抵抗はありましたよ。私は、中学校を卒業してからずっと今まで一貫して職人をしてきました。何十年もかかって、やっと一人前になってお金をもらっているのに、素人が簡単にやれるような開発をして、今まで何だったんだと。けれども、会社を発展させるためだと言うから、納得してきたわけです。昔は職人仲間でも、自分の技術は教えなかったんです。たとえば自分が初めてやる仕事があって、別の職人がそれを先にやっている。どのようにやっているんだろうと思って、屋根の裏側に行ってみようと思ったら、仕事の手を止めてしまうんです。それはそうです。自分が苦労して覚えたものを簡単に人に教えたいはずはありません。まだまだ、そういう人はいるでしょうし、私もそう思っていました。だけど、こんなことをしていたら会社は発展しないし、あなたも成長できないと社長に言われたんですね。

結果としては、いかがでしたでしょうか。

星 人に教えると自分が楽になるんです。楽になって仕事全体がはかどります。元々職人というのは、社員としての保証給はあっても、現場は請負みたいなかたちになる。ここの現場は100人だよ。80人で仕上げれば20人分はお前たちの儲けだよ。このように働いただけ入るというシステムだったから、朝早くから夜遅くまで働いたんです。逆に仕事が何時から何時までと決まっていると、定時が終わっているのになぜ仕事をやらせるのだということになります。とくに私の場合は、そういうことだけではありません。現代の名工に選ばれたいちばんの理由は、屋根の技術はさることながら、一般住宅の屋根材も含めていろんな屋根材や屋根の部品の開発をして、いろいろな特許を取ったからなんです。要は考案者になった。そういうことが認められたというわけです。

安藤 当社の一連の主力商品は、すべて星顧問が開発に関わっています。たとえば南欧ルーフ(洋瓦王)の場合、平板瓦を金属でできないかというのがあって、その設計からデザインまで星顧問が中心に、試作から全部やってきました。

星 結局、世の中一般に技術者が少なくなってきた。だからうちでも若い人を入れて、これからは誰でも貰ける

ような屋根材を作れ、役物を作れという会社の指令で、昔からのノウハウをいろいろ生かして、いろいろなシステムを開発しました。現代の名工に選ばれたのも、会社の指令があったというのが大きかったです。これが平成10年で、平成17年には黄綬褒章をいただきました。それも現代の名工に認定されたからということがありますので、ずっとつながっています。ただ、先ほども言いましたように、神社仏閣の屋根は新工法だけでは葺けません。必ず従来からの熟練の技術が必要になります。また、うちの開発でも試作品の設計はパソコンでやっていますが、金型を作る前は必ず、実際のを私が作ってみるんです。半田付けでも何でもやってちゃんと作ってから、金型のゴーサインを出さないと実際に使えるものできません。パソコンだけでは無理なんです。

やはり、現場を知った、技をもった職人さんが、開発をされるというのは強みですね。理屈で物を考えているだけではいいものできないですよ。

星 私も頭がものすごく固かったんですよ。だけどこの会社で柔らかくされてしまいました。

後継者育成への取り組み

熟練の技と新しいシステムでいいものを作る。そうすると現代の名工・星顧問の技術を若い人にどう継承されているかという部分も知りたいですね。

安藤 新工法の開発と並行して、建築板金技術者育成制度をスタートさせました。高校卒の若い人を採用して5年間で一人前にしようという制度です。板金職人を高校に求人するなんてことは、まずなかったんです。

星 ただ、一般住宅の屋根ですと5年くらいやれば一人前になれるんですが、神社仏閣の屋根の場合、実質は10年以上かかりますね。

安藤 5年では無理だというのはわかっていましたが、修業期間が長いとダラけますし、モチベーションの維持もたいへんです。5年あれば一人前にはなれなくても、屋根の施工について全体像はつかめるだろうと。

星 私が弟子だった時代も、5年修業して1年はお礼奉公をしましたから6年。最低限それくらいの修業は必要だろうということです。この制度をつくる前は、新しく採った人たちが3カ月くらいで辞めたりしました。会社ではどうしてなんだと分析したのですが、私は甘いからだと言ったんです。もっと厳しくした方がいいし、給料ももっと下げるべきだと。実は、職人だから出張もあるしということでもいい給料を出していたんです。だけど私の修業時代には給料なんてなかった。だから早く仕事を覚えて一人前にならないとダメだと思ったわけです。最初からたくさんもらったら、仕事を覚える必要はないわけですよ。学校に求人に行く場合も、「うちは厳しいし給料も安い」と言ってくださいと私は言いました。面接に来た人にも私はそれをハッキリ言った。朝早くから夜遅くまで働かなくてはならないよ、給料はいちばん安いよ。だけど、たとえばパソコンを習ったらお金を取られ



技術研修センター内の屋根模型。ここで実践的指導が行われる

る。給料もらいながら教えてもらえる。こんないいことないんだよと。そしたら、逆に人が来るし、辞めないようになりました。

安藤 あれは本当に不思議でしたね。

今の人だから甘くすればいいというものではないんですね。

星 厳しくすると、この会社は本気になって俺のことを育てているんだという気にもなるんですね。給料は安いといっても、5年間ちゃんと修業した者には報償金を出しますし、自分で独立してもいいんです。だから決して悪い条件じゃない。もちろん会社に残りたい人は残っている。そしたら終了した人は、「私はここに残りたい」と言ってみんな残っているんです。

いいお話ですね。それにしても、技術を伝えていくというのは一筋縄ではいかないんですね。

金属屋根の歴史とともに歩んだ職人人生

星顧問はこちらでお生まれになって、ルーフシステムさんも喜多方で発祥されました。この地域には昔からモノづくりの伝統があったということでしょうか。

星 雪国ですから、瓦屋根は少ないですね。トタンが入ってきたころから、屋根はトタンが多くなりました。だから金属屋根に関するノウハウができてきたというのがあります。こちらの職人は、雪にやられないようにみっちりやる。それで屋根を丈夫に葺くやり方が生まれて、それが今全国でいろいろ生かされています。

東京名所の浅草寺様の屋根が、喜多方発の技術というのも面白いですね。

星 私が小さいころは、まだみんな茅屋根でした。私の中学校のころから、茅屋根は火事の危険性が高いということで、茅屋根にトタンをかぶせるための「茅屋根改修資金」というのができて、こちらの板金屋さんはそれで忙しくなりました。ルーフシステムの創設者もそれで忙しかったんです。私の家は茅屋根の職人だったのですが、そのころから仕事が少なくなってきたので、私をトタン屋にした方がいいということだったのです。

その結果、現代の名工になり、黄綬褒章を受章されることになったんですね。

星 私が弟子に入ったのは昭和34年です。そのころから昭和45年くらいまでが、茅屋根改修で忙しかった。そのころちょうどカラートタンもできてきた。昭和30年ころは亜鉛鉄板ばかりでカラートタンはまだでした。

金属屋根と共に歩まれた人生ですね。亜鉛鉄板やトタンから始まって、チタンまで行かれました。どの屋根がいちばん面白かったですか。

星 やはりチタンの仕事に携われて幸せだったと思います。チタンは現代の品物ですし、施工技術がいちばん変わってきたのもチタンが出てからです。また、前に使っていたチタンは全然言うことをきかなかったのですが、今のチタンはずいぶん扱いやすくなりました。

硬い時代は、見通しは暗かったですか。

星 いや、こういう時代ですから、いずれ良いチタンが出るはずだと思っていました。最初に谷瓦だけやったときのチタンは、ハサミもすぐボロボロになるから職人はやりたがらなかったのですが、宝蔵門を経験した人はもうそんなことは言いません。メーカーも頑張って材質を改良しましたから。カラー鋼板でもガルバリウムなんかは硬い。それに厚さが0.4ミリなんかを使いますから、噛み合わせで二重になったところなど、ハサミでは切れるものではありません。逆に今のチタンは柔らかいし、厚さも0.3ミリとか薄いですからむしろ楽です。

ドイツへ屋根・壁展を視察に行く

星顧問とは、当社の関係者が、ドイツの屋根・壁展で一緒にさせていただきました。くれぐれもよろしくと申しておりましたが、非常に星顧問には強烈な印象を受けたようです。言葉が通じなくても職人同士お互いにコミュニケーションができる。何を見ても着眼点が素晴らしいと。向こうの板金と日本の板金との違いについて、何かありましたら。

星 とにかく日本と違うのは、ヨーロッパでは屋根でも壁でも板厚が厚いことですね。厚いから収めがラフで、こんなことを日本でやったら文句が殺到するみたいな部分がありますね。それと、われわれの場合は、チタンならチタン、鋼板なら鋼板だけで雨を漏らないようにする。収めで雨仕舞いを考えるのですが、向こうはシーラー材とかを使います。そうしないと完全に雨が入ってしまう。だから逆に技術がなくてもできるでしょうね。

ヨーロッパでは、こちらにあるような立派な成型機はないという話ですが。

星 あることはあるけど簡単なものです。うちのような20メートルも30メートルもある機械はないようですね。曲げたりする機械も、日本の方がいいものがありますね。

ドイツなどでは、マイスター制度という徒弟制度みたいなものがあるって、すごい技術を持った親方がいるという話ですが、ベースとしては誰にでもできるような仕事を志向しているのでしょうか。

星 日本と比べれば、かなり大雑把ですね。道具なんかハサミでも何でもとにかく大きいですね。やはり厚い

ものを切れるようになっていっているのでしょうか。

さっき星顧問が言われましたように、誰にお聞きしても向こうは収めがラフだとおっしゃいます。やはり星顧問が見られると、日本の仕事だったらNGだし、ご自身の勉強にもならないのでしょうか。

星 確かに作業はラフですが、部分部分を見ると、「なるほど」というアイデアがあります。たとえばドイツは面戸関係がものすごく発達している。私が考案した自在面戸にも、ドイツで見てきたことがヒントになっています。それに、瓦のデザインなんかにも、結構いいものがあるんですね。私は一般住宅用の金属屋根の開発もやりますから、そういうものが参考になります。

現代の名工が語るチタンの可能性

板金の世界を長年経験された目でご覧になって、これからの金属屋根についてどうお考えですか。

星 やはり銅板は見た目に落ち着いていますし、柔らかいから加工もしやすい。銅板ばかり扱っていたら、別の素材はやりたくなくなるくらいです。ところが浅草寺様以降、自分たちで生み出した新工法でチタンをやって、非常にやりやすかったし、格好もよかった。だから、これを境に考え方が変わってきたんじゃないかと。チタンの方がやっぱり軽いし長持ちする。それと浅草寺様をやって、チタンはいいなあと思ったのは、色の濃淡がつけられるので、瓦と同じ風合いに仕上げられるということです。あの屋根を瓦屋さんが見たときに、瓦だと思ったというほどです。また、私は金属屋根の施工指導で、東京や横浜あたりにもよく行きますが、最近、瓦は地震に危ないからということで、うちの金属瓦を東京の瓦さんが使うんです。それは、すでにお客様が金属の軽い瓦があることを知っているから、軽くて地震に危ないものはないかと瓦さんに言うからなんです。

瓦さんが金属瓦を。

星 さすがにまだ瓦さんがチタン瓦を使うところまでは行ってませんし、やはりチタンはまだ高い素材です。ただ、世の中にはお金を持っている人はたくさんいます。それと、私たちのまわりの人はチタンのことをよく知っていますが、ごく一般の人たちの中には、チタンって何だよという人もいますね。私が現代の名工や黄綬褒章で新聞に出たとき、地元の村のある人は、私のことをチタンを作った人なのかと思ったそうです。だけど浅草寺様をやってからは、一般にも相当知られるようになってきました。

ものづくり日本大賞受賞

板金で現代の名工に選ばれた方はなかなかいらっしゃいませんし、われわれもお会いするのは初めてです。お伺いしたいことは尽きませんが、最後に工場長から「ものづくり日本大賞」のお話を。

安藤 それに至るまでの話として、まず、福島県の「う

つくしまものづくり大賞」で第1回目の知事賞に選ばれました。知事賞というのは最高賞ですから、県内では一気に知名度が上がりました。

「うつくしまものづくり大賞」とおっしゃいますと。安藤 日本のモノづくりを推進しようという国の政策の下に、都道府県単位でモノづくりを奨励するような動きになり、福島県ではこの「うつくしまものづくり大賞」が2006年に創設されました。そのときに、喜多方市からは何を出すのかということになりました。実はその前に、浅草寺様の件を地元紙で大々的に取り上げてもらったので、その反響がすごかった。それを関係者の方が見ていて、じゃあルーフシステムのチタン瓦を推薦しようということになりました。それで知事賞をいただいたんです。

その後、経済産業省から県に、「ものづくり日本大賞」の第2回にノミネートする企業はないか、という打診があり、県から各市町村にどこかないかという打診があったのですが、喜多方市でうちを推薦したいと言ったら、県の方でもすでに推薦するつもりだったということで、強力なバックアップをいただくことになりました。東北経済産業局の方でも、できれば最高賞をということで、強力に薦めてくださったそうです。そういう経緯があって、経済産業大臣賞をいただきました。世界で初めてチタンの瓦を開発したということもさることながら、関係者のみなさんの協力があったからです。受賞のことがいろんなメディアで紹介されたこともあって、いきなりチタンの問い合わせが殺到しました。数件しかなかった問い合わせが、80件、90件というふうには増えたんです。それまでは「チタンの屋根は聞いてはいたけど、実際にそんなことができるのか」というのが正直なところだったかと思えます。浅草寺様に使われたということが全国に流れたとたんに、実感として湧いたのでしょね。チタンの資料がほしい見積もりがほしい、という問い合わせが急激に増えて、同時に受注も増えました。今は当社が関わるものだけでもチタンの物件は30件を超えています。

先ほど拝見していましたが、「元気なものづくり企業」という認定証がありました。

安藤 2年に1度くらい経済産業省で、優秀な技術をもった中小企業を全国からピックアップして認定しています。その中で2008年版の300社の中に認定されました。これに関しては、逆に経済産業省から「何万社と中小企業がある中の300社だから、名誉あることなのでどんどんPRしてください」と言われています。これも、ものづくり日本大賞で大臣賞を取ったということもあって、技術力を高く評価していただいたのだと思っています。

受賞ラッシュという感じですね。

安藤 おかげさまで、これも浅草寺様効果でしょうね。話題性をもったお寺ですので、われわれもラッキーだったのでしょうね。

たまたまラッキーだったというのではなくて、開発を着実に進められた。それが宝蔵門の受注も引き寄せた。最初の物件であれだけ立派な工事が成し遂げられたのも、長い年月をかけて努力されたからでしょうね。



県内最高賞から日本の最高賞へ。右はものづくり日本大賞の表彰楯

環境に寄与する屋根がこれからの目標

新工法の開発から浅草寺様・宝蔵門完工に至るお話には、改めて頭の下がる思いがしました。つねに一步先を読んで、組織的に取り組まれていますね。

安藤 専門の開発チームを常にこれだけ抱えているというのは、一種独特でしょうね。知的財産も全部社員が担当しているというのはあまり例がないかもしれません。

一方で人材育成にも注力され、技術の継承も図られています。

安藤 社内には「改善提案制度」があり、全社員に毎月1件、改善提案を出させています。今ではチタンの施工でも、すぐれたアイデアが出てきます。現場での問題点だとか、製品をこう改良すればいいだろうとか、みんな積極的です。職人の技術のみに依存するのではなく、情報を共有することで全体のレベルを高めていく。そういった部分は製品や工法の開発にも助けになっています。

やはり今後とも良質で均質な金属屋根を通じ社会貢献するというのが理念だと考えてよいのでしょうか。

安藤 これからは、環境問題に対応した金属屋根に取り組んでいく、地球温暖化対策としての屋根の機能を考えていくといったことが重要になると思っています。太陽光発電もそうですし、緑化システムもそうですし、現在はCO₂削減に寄与するような製品開発に取り組んでいます。単純に雨漏りしない屋根を作ればいいのかというのではなくて、環境問題対応の屋根システムに取り組んでいく。それがわれわれの課題であると考えています。

貴重な時間を本当にありがとうございました。また、本日は現代の名工から直々にお話をお伺いできまして、たいへん勉強になりました。浅草寺様では、いよいよ本堂屋根のチタン本瓦葺き工事が始まりますし、星顧問にご活躍いただく場面が、またたくさん出てくるかと思えます。いつまでもお元気で、私どもにもお力添えをいただければありがたく思います。

ルーフシステム株式会社様ホームページ
<http://www.roof-systems.co.jp/>